

氏 名	小 村 純 江
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 232 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	妙見信仰の民俗学的研究 ―日本的展開と現代社会―
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 佐 野 賢 治 副査 神奈川大学 教授 前 田 禎 彦 副査 神奈川大学 教授 安 室 知 副査 金沢大学 教授 平 瀬 直 樹

【論文内容の要旨】

妙見信仰は、北極星や北斗七星を神格化した妙見菩薩に対する信仰である。天体の北極星や北斗七星は牧民や海民にとって方角や時季などの指標として諸民族においてさまざまな民俗信仰を示しているが、わが国では加えて妙見菩薩への信仰として古代から現代まで、また地域的な特徴を示しつつ展開してきている。本論文は、中国・朝鮮から渡来人によってもたらされた妙見信仰の現代に至るまでの性格を時代ごとに論じ、その持続と痕跡を各地に残る信仰民俗誌から析出し、その意義を探ることにより日本の民俗信仰の特質を明らかにするとともに、現代の生活の中において妙見信仰が地域社会に与えた影響を、民俗学的な視点から具体的に明らかにすることを目的とする。

以下、本論文はこの信仰の通時的性格と現代の地域社会における信仰民俗誌における位置付けを記述、分析するために、二部構成の章節立てを取り、妙見信仰の日本的展開とその現代的意味を論じる。

序章 I 研究背景 II 研究の目的 III 研究史―妙見信仰を中心として

IV 問題の所在と課題 V 研究の方法と本論文の構成

第一部 日本における「妙見信仰」の展開

はじめに

第一章 星と人との関わりの軌跡

I 日本での星に対する意識 II 日本における星辰信仰―北斗七星・北極星を中心に―
III 北斗七星・北極星を神格化した妙見信仰 IV まとめ

第二章 「妙見信仰」―日本における変遷と分布―

I 妙見信仰の変遷 II 妙見の分布 III 代表的な妙見 1 福島県相馬市の相馬妙見 2 大阪府の能勢妙見山 3 山口県山口市の大内氏の妙見 4 熊本県八代市の八代妙見
IV まとめ

第三章 妙見の像容

I 文献資料からみた妙見菩薩像 II 妙見菩薩像をみる上で特徴として表れる様相
III 現代に伝わる妙見菩薩像―四つの事例から IV まとめ

第四章 民俗学的視点からみた妙見の特徴

I 先行研究からみた妙見の特性 II 先行研究からみた妙見の特性の分析 III 南関東地域

における妙見の特性 IV 民俗学的視点からみた妙見の特徴 V まとめ
おわりに

第二部 妙見信仰と地域社会

第五章 氏神として伝わる妙見—東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から—

はじめに I 百村の妙見寺と妙見宮 1 妙見寺・妙見宮の由緒 2 民俗行事の始まり
II 「妙見宮（妙見尊）」の三つの民俗行事 1 神化まつり（1月8日） 2 蛇より行事（8月7日） 3 星まつり（12月下旬の冬至の日） 4 地域の人の百村への想い—三つの民俗行事を中心に III 稲城市百村地域に伝わる妙見の現代的意義 おわりに

第六章 祭礼の中に武神として伝わる妙見—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—

はじめに I 千葉市中央区における妙見に係る諸問題 1 研究史—千葉県に伝わる妙見を中心として 2 問題の所在 II 妙見本宮—千葉神社で行われる「妙見大祭」の変遷 1 資料からみる「妙見大祭」 2 「御浜下り」を行わなくなった「妙見大祭」 3 「御浜下り」の歩み 4 妙見の祭礼の特徴 III 妙見本宮 千葉神社「妙見大祭」—平成 24（2012）年8月の祭礼 IV 下総國 寒川神社例大祭—平成 24（2012）年8月の祭礼 V 古老の記憶 VI 二つの祭礼にみられる妙見の現代的意義 おわりに

第七章 大衆文化的妙見の受容—東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限に伝わる妙見—

はじめに I 江戸時代の妙見に係る諸問題 1 研究史—江戸時代の妙見を中心として 2 問題の所在 II 江戸時代の妙見信仰 III 江戸時代に民衆の間で花ひらいた妙見信仰の代表的拠点 1 江戸の「柳嶋妙見」 2 能勢妙見山東京別院 IV 江戸時代の文献・資料・芸能等から妙見をみる 1 妙見信仰関係の書の公刊 2 日常の中にみられる妙見 3 芸能・芸術などにみられる妙見 4 浮世絵にみられる妙見 5 北辰一刀流と妙見 V 現在の「柳嶋妙見」界限における妙見 1 「柳嶋妙見」界限における妙見への意識 2 「柳嶋妙見」界限に伝えられる妙見の現代的意義 おわりに

第八章 変遷をたどり現代に息づく妙見—埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義—

はじめに I 秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題 1 研究史—秩父地方の妙見を中心として 2 問題の所在 II 調査地の概要 1 秩父地方 2 秩父地方と妙見 III 秩父地方の信仰体系にみる妙見との関わり 1 屋敷神として宮地地域に伝わる妙見 2 村地域の氏神としての妙見 3 生産神として地域振興の育成に係る妙見 IV 現在の秩父地方における妙見 1 秩父地方における妙見への意識—聞き書きを中心に 2 秩父地方に伝わる妙見の現代的意義 おわりに

終章

I 現在地域に伝えられる妙見の役割 II 民俗信仰の視点からみた妙見信仰の位置付け
巻末に参考文献一覧を付す。

以上の構成で、まず多様な妙見信仰を対象とした先行する研究論文の課題、方法、結論等を詳細に検討し問題点を一覧化、その上でこの信仰が現在も行われている地域の信仰民俗誌の作成を試みる。その結果、歴史・地域を貫いて日本の妙見信仰に通底する「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つの性格、特徴が導き出された。この性格を典型的に示す事例を関東地方の四箇所の事象、「東京都稲城市百村の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の祭礼」「東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」で取り上げ、現在の伝承態における妙見信仰の歴史性を考証したのが本論である。そこに共通する妙見信仰の役割は、それぞれ古態の持続性の維持、地域融和の醸成、文化・芸能・学問の守護

神、地域振興の育成といえる。

結論的に言えば妙見信仰は、時代や地域により様相を変えてはいるが、それは人々が地域社会をよりよい形で維持していくために妙見信仰を活用し、それに応え得る多様性を生成してきた結果といえる。現在、地域で認められる妙見の霊験や妙見への願いは、その地域で最大限遡れる時代の妙見像に依拠している。言い換えれば、盛時の妙見信仰の痕跡が潜在的に現在まで引き継がれ、地域における現在の妙見の特徴として強弱の相を示しながら表れている。これらの特徴は、現在地域に伝わる妙見信仰の中に引き継がれ、特徴に呼応した役割を地域社会で果たしながら、今後も伝えられていくことになる。また、日本における妙見信仰を民俗信仰の中で位置づけると、天体の星に対する自然崇拜、固有信仰に道教・仏教・儒教の成立宗教が融合した民族宗教の一性格を示していることが指摘できる。

【論文審査の結果の要旨】

仏教伝来とともにあるいは時を隔てず日本に伝えられたとされる妙見信仰は、仏教公伝から明治維新までの約 1300 年間、少しずつ形を変えながら日本各地に伝播し、その地域での特性を加味しながら各地で受容されに定着していった。本論文は、日本の各時代、各地域でその信仰が認められながらその多様性などから従来、総合的に論じられることがなかった妙見信仰を民俗学的視点を中核に据えながら果敢にその全体像を描くことに努め、その基調に流れる性格の究明に取り組んだ労作といえる。言い換えれば、現時点における妙見信仰がいかなる信仰実態を示し、その史的背景はいかなるものかをこの信仰が現存する地域の信仰民俗誌を精細に作成し、そこから析出された問題点を歴史的にフィードバックさせて分析、考察したものといえる。このため本論は全体的に時間軸の始発を現代に設定したフィールド調査の成果を十分に活かした実証性の高い内容を示しており、章ごとに課題設定を行いその結論を明確に述べるなど構成もしっかりとしており、論点が理解しやすい体裁がとられていることをまず評価したい。これは学説史を詳細に検討し一覧表にして整理、問題点を明らかにした上で立論したことに拠る。

一方、妙見信仰を現在の民俗誌の分析からその性格や役割の究明に力点を置いたために、歴史的諸史料の扱いとの間にバランスを欠いている点が見られた。妙見信仰の遡及において過去の歴史的な妙見の痕跡を知る補助資料的扱いではなく同時代資料としての史料の読み込みが必要である。妙見菩薩の像容の歴史的形成についても、吉祥天如像、童形、道士形、武装形の四つの形の妙見菩薩像を史料から抽出したとの指摘をするがその意味や背景の説明がさらにほしかった。

また、妙見信仰が行われている地域の信仰、祭礼を中心とした精細な民俗誌を現地調査に拠り作成、そこからの立論は高く評価できるが、生業などにも言及すればさらに説得的な論考となる。千葉神社・寒川神社の妙見に由来する二つの祭礼「妙見大祭」「御浜下り」などにうかがわれる海との関係、漁民性の反映などが課題として俎上することになるであろう。いずれにせよ、妙見信仰に焦点を当てた精細な祭礼民俗誌の作成は本論の白眉であるが、逆に今後より完成された総合的な民俗誌の中での妙見信仰の位置づけが期待される。

そもそも妙見は菩薩信仰とされながら、すくなくとも民間では仏か神か曖昧である。すでに中国で道教と仏教との習合化を経ての伝来もその一因である。星神信仰と妙見信仰との関係、言い換えれば、著者の自然の星と文化的な星辰に対する基本的な視角も問われることになるし、その間に介在する宗教者、仏教僧侶・神主・陰陽師・修験者の関与をどう捉えるかの問題となるが、本論ではこの方面への言及は少なかった。

菩薩信仰である妙見信仰は当然外来の仏教教理を反映しており、土着の「固有信仰」との習合の様相を各時代・地域の妙見信仰が呈しているとの説明は了解できる。しかし、その相関関係において外来の仏教と土着的なカミ信仰の神仏交渉史、通時的あり方に注目する「民間信仰」論、地域社会における宗教・信仰の機能の意味付けを重視する共時的な「民俗宗教」論などの論点がすでに提示されている中、筆者は妙見信仰を固有の土着信仰と成立宗教の融合した「民族宗教」の立場から捉える有効性を指摘する。この裏付けが今後の本論の更なる展開に期待されることになる。

本論文は、以上のようにさらに補い、深化させるべき点もあるが、妙見信仰に関する民俗学・宗教学・歴史学方面の文献・論文を精読し、先行研究の学説の整理と検討を綿密にした上で研究課題を設定し、それに対する史・資料の博搜と関係箇所への現地調査による諸資料の総合化とその分析と考察が的確になされている。

以上、妙見信仰の日本的受容とその歴史的展開を概括し、その上でこの信仰の地域的展開の異同の意味を分析し、妙見信仰に通底する性格を具体的に提示したことはまさに歴史民俗資料学の論文として高く評価できる。また、口頭試問において著者に更なる質問も試みたがいずれも相応しい応答であった。その結果も合わせ、小村純江氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。